

カンボジアの図書館事情と日本の支援（特集 開発途上国における図書館の役割と支援活動）

著者	北野 康子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	126
ページ	26-27
発行年	2006-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005522

特集

特集／開発途上国における図書館の役割と支援活動

カンボジアの図書館事情と日本の支援

北野康子

●カンボジアの教育・出版事情

カンボジアは、一九五三年にフランスから独立したが、その後一九七五年から一九七九年までクメール・ルージュの支配と内戦が続き、政治的混乱を経験した。この時期には教育施設は閉鎖され、図書館の文献は失われ、教育のある者は殺された。国立統計研究所のデータによれば、二〇〇四年の識字率は、七四・四％、二五歳以上で初等教育を修了していない者は、五四％に及ぶ。学校の建物と能力ある教師の数が不足し、初等教育では、二部授業や三部授業が行われている。子供は、就学よりも特に農村では労働力と見なされる。

カンボジアの伝統は、舞踊、音楽、彫刻などの芸術と、口承伝承であり、文字は、王宮と寺院で用いられた。庶民は僧侶になるか、寺院で学ぶか、高級官僚になる以外は、文字に接することはなかった。農村の家庭では、読み物としての活字はほとんど見られない。読書の習慣はない。

新聞、雑誌、図書の出版は、ほぼ都会、特にプノンペンに限られており、農村への

輸送手段と道路の状況が問題である。農村部には図書館・図書室の数が少なく、購入予算もないので、出版物は売れない。紙と印刷用インクは輸入品であり、安くはない。新刊案内や、書評誌もない。海外へ図書を注文しても、郵便事情や、送金の困難さがある。洋書は、大きな書店の在庫から選書することになる。書店の組合や、海外の雑誌購読のための代理店もない。

●カンボジアの図書館事情

カンボジア国立図書館は、一九二四年にフランス植民地政府により公文書館の一部として開設された。一九五〇年代になり、クメール語（カンボジア語）の文献も加わるようになった。しかし、クメール・ルージュにより壊滅的被害を受けた。一九八〇年代には、ソ連やベトナムによる支援、その後もアメリカのコーネル大学などの支援を受けた。建物も老朽化し、閉鎖された時期もあり、二〇〇四年に週末を除き国民に公開されるようになった。八万冊の蔵書があるが、納本制度の制定が望まれる。

王立プノンペン大学フンセン図書館は、

一九九七年に大学の中央図書館になった。五万冊の蔵書は、日曜日を除き七時半～一七時迄（土曜日は、八時～一六時迄）一般にも公開され、日に五〇〇人の利用者がある。閲覧貸出と蔵書の検索は、コンピュータにより可能である。カンボジア日本協力センターは大学に付置され、図書室がある。その他の公立大学（およそ一〇校）及び私立大学では、図書館業務の研修を受けたフルタイムの職員の確保は難しい。大半の職員は、副業をしながら勤務をしている。

私立のカンボジア大学は、地理的条件がよく毎日七時～二〇時迄公開されている。ほとんどがユネスコのシステムを使い、何らかの機械化を試みているが、蔵書検索が満足にできない所もある。図書購入及び雑誌購読の恒常的予算がないので、外国からの寄贈に頼っている。

仏教研究所は、一九二二年にシソワス王によりカンボジア図書館として開設された。一九三〇年に研究所となり、パリ語の『トリピタカ』（南伝大蔵経）一一〇巻の翻訳を完成した。一万冊の仏教（上座部仏教）や、カンボジアの歴史文化に関する文



フンセン図書館内にて(チェム・コーン氏撮影)

献を一般にも公開している。カンボジア農業開発研究所(CARDI)は、一九九九年に開設され、三〇〇〇冊近い蔵書を持っている。特に米の増産による食料の確保を旨とし、国際稲研究所及びオーストラリアとのプロジェクトがある。その他の専門図書館には、アメリカにより開設されたクメール・ルージュに関する文献を収集しているカンボジア・ドキュメンテーションセンターや、地方では一番大きい三〇〇〇冊の蔵書を持つクメール研究センター等がある。

●日本の支援

国際交流基金は、毎年日本に関する図書への寄贈の申請を受け付けている。施設に対する支援として、日本万国博覧会記念協会による王立農業大学の図書館、立正佼成会による仏教研究所の建物の建設がある。

フンセン図書館には、国際協力機構(JICA)の青年海外協力隊員のシステム・エンジニアと、シニア海外ボランティアの司書が派遣され、システム開発や目録データのチェック等を行っている。カンボジアに関する図書の収集や、ウェブサイトによる蔵書検索のための情報機器の購入の支援が行われた。また、専門家による医療技術者養成プロジェクトでは、フンセン図書館が地方の医療関係の図書室職員のトレーニングを引き受け、そのフォローアップも行っていることは評価されてよい。学生は英語やフランス語よりもクメール語の図書を望

んでおり、この国の出版活動への支援が望まれる。また、寄贈図書には、もっと入門書や新刊書を揃える必要がある。

カンボジア日本協力センター(CJCC)は、日本の社会文化、日本語教育、日本留学及びビジネス等、日本とカンボジアの様々な情報の発信基地を目指している。また、同図書室は、図書の展示、紙芝居、読書会等の事業を通して、両国の相互理解の推進に貢献している。さらに、将来的には他の日本センターやカンボジア国内の図書館等とネットワークを構築し、より高質の情報サービスを提供していく計画がある。

NGOの日本国際ボランティアセンター(JVC)は、持続可能な農業、農村開発や環境問題に関する四〇〇〇冊の資料を一般にも公開している。東南アジア文化支援プロジェクト(CAPSEA)は、プノンペンの貧困者の多い場所に絵本類を集めて図書室を公開している。シャンティ国際ボランティア会(SVA)は、難民救済活動からスタートし、学級文庫のための職員養成や、そのフォローアップも行っている。両者とも農村へ移動図書館を巡回させている。また、カンボジアの民話や辞書の出版、仏典や日本語の翻訳も行っている。日本から寄贈される絵本や文房具の高価な輸送費を考えると、子供にわかりやすい自国の物語の出版はよりよい支援である。また移動図書館での紙芝居や、読み聞かせは、豊かな情操と、読書の習慣を育成している。

●カンボジアの図書館が果たす役割と今後

大学、研究所やNGOの図書館・図書室が一般にも公開されて、公共図書館の役割も兼ねているが、その数と開館時間は限られている。ただ、インターネットが無料または安価に使える所もあるので、情報技術のインパクトが今後、情報へのアクセスを容易にする可能性はある。

しかしながら、図書館情報学の研修を海外で受けられる職員の数に限られているので、国内での研修が組織的になされなければならない。貴重な情報資源の共有のために、図書館ネットワークによる共同分担目録のためのナショナル・センターが設立されなければならない。

いずれの図書館・図書室もその役割は、教育や研究の支援であり、日本の支援は、教育の普及や教育水準の向上に貢献している。カンボジアの発展にとって次世代の人材を育成する教育こそがその鍵であり、図書館の役割は大きいといえる。

(さたの やすこ) 王立プノンペン大学「付記」本稿の執筆にあたって、セン・セイン氏(王立プノンペン大学図書館長)、チェム・コーン氏(王立プノンペン大学図書館員)、ティア・セアンホン氏(カンボジア日本人材開発センター、ライブラリーマネージャー)より貴重なアドバイスをいただきたい。